



「防災の日」に思う

校長 石川 朋実

30日間の夏休みが終わり、学校に子どもたちの明るい声が聞こえるようになりました。残暑も厳しく、まだ暑い日が続きそうな予報となっております。熱中症対策をしっかりと行いながら、子どもたちが安心して学校生活を送れるよう、引き続きご家庭との連携を大切にしてまいります。また、お子さんのことで気にかかることがありましたら遠慮なく学校にお知らせください。

さて、9月1日は「防災の日」です。1923年の関東大震災、1959年の伊勢湾台風を契機に、防災意識を喚起するため1960年に制定されました。記憶の新しいところでは昨年1月の能登半島地震、そして、先月30日、カムチャツカ半島付近でマグニチュード(M)8・7を観測した地震で、函館市内に津波警報が発令されました。防災無線で避難を呼びかける放送が繰り返し聞こえてきました。地震の揺れを感じなくても、津波などの影響があることに気付かされました。被害に遭われた皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

ところで、函館市『学校における防災教育』の小学校段階における目指す子ども像は、右のように示されています。学校では、教科学習（4年社会「自然災害にそなえるまちづくり」、6年理科「地震や火山と災害」等）を通して、「日常生活の様々な場面で発生する災害の危険」の知識を身に付けます。そして、自分たちの学校のつくり、函館の気候や地形なども理解した上で、避難訓練のような行事を通じ「安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる」とします。地震、台風、集中豪雨、洪水、大雪などの自然災害はもとより、ミサイル、事件、交通事故、感染症、最近では「ヒグマの出没事案」など、危機事象は多種多様です。最優先で最重要なことは「自分の命は自分で守ること」です。正しい情報を選択し、自分の頭で考え、周りの人と協働して対応する力が必要です。

自然の力の前に、私たちは無力に感じることがありますが、互いに支え合って、希望を見出すことができる信じています。今回、避難所を開設した際も、町会の方々が直ぐに来校してくださり、避難していた本校職員や学童の方々をはじめ、避難された皆さんのが、高齢者の体調を気遣ったり、配慮が必要な方の避難スペースを確保したり、車イスで避難された方を3階までご案内したりする姿が見られました。学童の子ども達も真剣な表情で、避難の指示に従い、友だちのことを気にかけていました。予測つかない未来も、多くの可能性に満ちた子どもたちに「生きる力」をしっかりと身に付けさせることが「防災の日」の意味でもある、という思いを抱きました。

行事の多い2学期。始業式から養護教諭を目指す2名の教育実習も始まります。子ども達一人一人が「めあてをもち」「自分の考え方をもち」自分や相手の「よさに気付」き、さらに「かがやく こまばっ子」となるよう教職員一同、見守り支援し導いてまいります。ご理解ご協力のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。

発達の段階に応じた防災教育「小学校段階」
日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる子ども

9月3日(水) 引き渡し訓練
学校の教育活動中、大きな自然災害や事件・事故が発生した際に、児童の保護者への引き渡しがスムーズに行われるよう訓練を実施します。